

聖書：Ⅱペテロ 1：8～11

説教題：召しと選びを確かに

日時：2018年1月28日（朝拝）

私たちはクリスチャンの信仰生活をどのように考えているでしょうか。自分の罪が分かり、イエス様が私のために十字架にかかってくださったことを信じて罪を赦されたと知ったら、それで終わりなのでしょうか。あとは何もすることはないのでしょくか。イエス様の再臨か、世界の歴史の終わりの日が来て、天国に入れてもらえる日が来るのをただ待つだけなのでしょうか。ペテロはそうではない！ということをお手紙で語っています。信仰をいただいたクリスチャンにはまだまだ取り組むべき課題がある！と。その基礎になることとしてペテロは神が与えてくださる力と目的について最初の3節と4節で語りました。3節で、いのちと敬虔に関するすべてのことを主イエスの神としての御力が与えると言われました。イエス様を信じてまことの「いのち」に生かされている私たちは、いよいよ「敬虔」な歩みへと進むべきですが、そのために必要な力はすべて主イエス・キリストが与えてくださると。そしてそのゴールは何でしょうか。4節にそれは「神のご性質にあずかる者となる」とありました。創世記に記されていますように、もともと神のかたちに造られた私たちは、神と共に歩むことを通して、神のかたちを發展させ、いよいよ神を映し出す最終状態に達するようにとの目的の下に生かされてきました。しかし人間は罪を犯して、そのコースから外れ、落ちてしまいました。ところが神は当初の計画を捨てませんでした。イエス・キリストによって私たちを救い、本来のコースに立ち戻らせ、最初のご計画通りに神を鏡で映し出すような最終状態に達する者となるように導いてくださっています。だからあなたがたはあらゆる努力をして、すでに頂いた信仰に様々な徳を加えて行け！と5～7節で語られました。「信仰には徳を、特には知識を、知識には自制を、自制には忍耐を、忍耐には敬虔を、敬虔には兄弟愛を、兄弟愛には愛を加えなさい」と。今日の箇所もこの勧めの続きとなります。

まずペテロが言っていることは8節にあるように「これらがあなたがたに備わり、ますます豊かになるように！」ということです。私たちは5～7節のリストを見てどう思ったでしょうか。ある人は最初の信仰は確かに自分にもあるが、その次の徳も、その次の知識も、その次の自制も、忍耐も、敬虔も、みんな私に欠けていると思ったかもしれ

ません。またある人は、私には徳はないけれども知識は少しあるとか、また他の人は自制や忍耐は少しあるようだが、敬虔や愛は全く足りないなどと思ったかもしれません。しかし他のものに比べて、これとこれについてはまあまあだと考えて、それについてさらに取り組むことをやめてはなりません。なぜならこれらはある程度見られれば良いのではなく、「ますます豊かになるように」と言われているからです。前回も述べましたように 5~7 節のリストは、その内のいくらかを持てば良いものではなく、クリスチャンなら、そのすべてを持つべきところのものです。それらがますます豊かになるように！ゴールが「神のご性質にあずかること」であるなら確かにそうです。そしてペテロは言います。そのように取り組むなら、あなたがたは役に立たない者とか、実を結ばない者になることはありませんと。確かにこのように歩む人は役に立つ人、また実を結ぶ人になるでしょう。それは「私たちの主イエス・キリストを知る点で」と言われています。原文は「私たちの主イエス・キリストの知識へと」と書かれています。つまりこれは、このような歩みを通して私たちはイエス・キリストを益々知る者へと導かれて行くということです。私たちは最初、イエス・キリストを知って信仰へと導かれましたが、それでイエス・キリストを十分に知ったわけではありません。イエス・キリストを最初に知り、これらの取り組みをすることを通して、益々イエス・キリストを知る者、イエス・キリストの素晴らしさを体験を通して味わい知る者へと導かれて行くのです。パウロはピリピ人への手紙の 3 章でキリスト・イエスを知ることのあまりの素晴らしさゆえに、私は他のすべてのことをちりあくとたと思っていると言いました。私たちのために、その尊い命まで捨て、私たちを今日も愛し、偉大な力で導いてくださっているイエス様を知ること以上に素晴らしいことはこの世にはありません。だから私はイエス・キリストを益々知ることを求めて、ひたむきに前に向かって走っているとパウロは言いました。このようなキリストを知る知識は、ただ椅子に座って机で勉強しているだけでは分からないということです。それは 5~7 節の勧めに従うこととセットなのです。それがますます豊かになることを通して、キリストを益々深く知る者、また実を結ぶ者とされて行くのです。

そのようにしない人はどうなるかが 9 節にあります。その人は近視眼であり、盲目であると言われています。近視眼とは近いところしか見えない人のことです。つまり目先のことしか見えていない人。つまり目の前にあるこの世のことしか見えていない人のこと。

その人は「自分の以前の罪がきよめられたことを忘れてしまったのです」と言われています。クリスチャンはイエス・キリストを信じて罪を赦された人です。以前の罪がきよめられ、罪から離れて、神と永遠の御国で共に住む生活へと新しく出発した人です。ところが7～9節で語られた勧めに従っていない人は目先のことしか見ていない人。自分はどこに向かって進んでいるかが見えていない。またなぜこの旅に出発したかも忘れていいる。そして目の前のこと、この世のことにばかり思いを向けて、その辺りを行ったり来たりウロウロしている。そういう意味で盲目と言われています。その人は以前の罪がきよめられたことを忘れていいる。そして人生を見失って、さまよっている人になっている。そうならないように！とペテロは言っているわけです。

そこで彼はもう一度、肯定的な言い方で読者たちに勧めます。今日、二つ目に見るペテロの勧めは、「ますます熱心に、あなたがたの召されたことと選ばれたことを確かなものとしなさい」ということです。「召し」とは何でしょうか。「召し」とは、3節にも出て来ましたが、救いへの召しのことです。これは救いへとグイッと引き寄せる神の一方的で力強い行為のことです。ここに私たちの救いは私たち人間の側から始まったのではなく、神から始まったことが教えられています。私たちが今日、イエス様を信じて、信仰に歩んでいるのは、確かに私たちが信じたからではありますが、私たちの信仰に先立つ神の「召し」があったからなのです。その召しとセットで「選び」ということが言われています。論理的に言えば、「選び」は「召し」に先立ちます。神が私たちを救いへと選んでくださったことがまずあり、それに基づいて神は歴史の中で私たちを召してくださいました（ローマ8章30節）。この召しと選びを確かなものにせよ！とはどういうことでしょうか。

それはこのように考えることができます。神の選びまた神の召しは必ず結果を出します。神は選んだ人、救いに召した人を必ず神のご性質にあずかる者とするという最終ゴールまで導きます。そしてそのプロセスとなる5～7節の道を踏ませます。ですからそこに私たち自身が生き抜くことによって、自分が神に召されていること、選ばれていることを確かなものとしなさい！ということ。これはもちろん私たちの良い行いが救いを勝ち取るという意味ではありません。あるいは神に選ばれ、召されたことを人間的なやり方で無理やり証明して行くということでもありません。そうではなく、神に選ば

れ、召された人は必ず5~7節に記された道を通ってゴールへと進んで行くのですから、そのことを信じて、自分自身も一生懸命、その道に歩むことにより、本当に神の選びと召しをいただいている者であることを確かなものにして行け！ということです。私たちが改めて心に留めたいことは、神の導きを受けている人は必ずこういう姿を示すということです。もちろん私たちの歩みは地上にある限り、いつまで経っても不完全です。この世で完全に到達する人はいません。しかし少なくともそのしるしは見られなければならない。証拠は現れ出るのです。ですから神は一方的な恵みによって救ってくださると言っていて、ペテロが述べるこの道に歩まない人は自分を偽っていることになるのです。今持っているこの信仰まで導いてくださった神は、最後まで私を導いてくださると心から信じるがゆえに、神に祈りつつ、信仰には徳を、徳には知識を、・・・という道のりを、少しずつではあっても、着実に進んで行く。その歩みを通して、自分が神の召しをいただいていること、選びの内にあることを確かめて行くことができるのです。

「これらのことを行っていれば、つまづくことなど決してありません」とペテロは言います。すなわち途中で転んで天の御国に到達できなくなるというようなことはない。この取り組みの先には素晴らしい将来が待っている。それが11節にこのように書かれています。「このようにあなたがたは、私たちの主であり救い主であるイエス・キリストの永遠の御国に入る恵みを豊かに加えられるのです。」 私たちは天の御国に入ることをどのように考えているのでしょうか。もしかすると、この世にある間にイエス様を信じさえすれば、後は何もしなくても、その時が来れば、そこに入れて頂けると考えているかも知れません。こう考える場合、その人の中では、この世の歩みと天の御国はつながっていないこととなります。この世の歩みがどうであろうと、それに関係なく、天の御国が現れたら、そこに入れて頂けると考えているからです。しかしペテロのメッセージは違います。彼が言いたいのは、この地上の毎日の生活における益々熱心に取り組むという歩みの先に、天の御国が開けるというものです。今日ここでの取り組みが、やがての御国につながっている。ですからここで何もしない人は、御国に至る道を進んでいない人です。ここのイメージはある家の主人が、その友が到着する際に盛大に喜び迎えるという時のものです。あるいはその主人が忠実なしもべが働きを終えて家に帰って来る時、「良くやった！」と賞賛しながら、喜び迎える時のものです。私たちはそのようにして、やがて私たちの主であり救い主であるイエス・キリストの永遠の御国に迎えら

れます。それは大いなる「恵み」の出来事として語られています。私たちが立派に歩んだからではありません。私たちは自分を誇りながら、当然私はそのように迎えらるべき人間だという顔をして入って行くのではないのです。私たちの歩みはどこまで行っても不完全です。ですからそんな私たちが御国に入れられることは大いなる恵みです。しかしそれはその日までの私たちの努力する歩みとセットのこととして言われています。主は私たちをそのように導くのです。私たちが益々自分の召されたことと選ばれたことを確かなものとして行く歩みの積み重ねの先に、ついに永遠の御国に入れてくださる恵みを豊かに与えてくださるのです。

私たちはペテロが示してくれたこの視点を持って信仰生活を歩んでいるでしょうか。今日、改めて心に留めさせられることは、私たちの信仰に先立って神の召しと神の選びがあったのだということです。神の選びと召しをいただいた者たちとして、今日の私たちのこの信仰があります。このことをまず感謝したいと思います。しかし同時に覚えるべきは、ここに現れている神の召しと選びは、今の信仰にとどまるものではないということ。それはさらなる先をみざしています。ですから私たちはその先へとさらに進むことによって、召しと選びと確かなものとするように！とされています。果たしてこれは私たちにとって重荷となることでしょうか。気分が重くなる話でしょうか。しかし3節に、いのちと敬虔に関するすべてのことを、主イエスの神としての御力が与えてくださると言われていました。私たちを選び、召してくださった神が、これからの取り組みをするための力をもくださいます。ですから私たちにとって大切なことは、必ずそのようにさせてくださる主の力、神の力を信じることです。そしてその主に信頼し、祈りつつ、感謝と喜びを持って、一歩でも半歩でも、5～7節に示された道を進むことです。そうする時に、私たちは自分が神に召された者であること、神の選びの恵みにあずかっていることを、手応えをもって確信できる者へと導かれて行く。その人は、その取り組みを通していよいよ役に立つ者、実を結ぶ者へと導かれて行きます。そしてつまずくことがなく、ついにやがての日に、私たちの主であり救い主であるイエス・キリストの永遠の御国に入る恵みを豊かに加えられる者へと導かれて行くのです。